
ある日突然友達ができた

Mな主人公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日突然友達ができた

【Nコード】

N8560V

【作者名】

Mな主人公

【あらすじ】

整備士をめざす僕はある日突然日常が変わった

出会い（前書き）

文章下手だけどもよろしくです

出会い

浪嵐高校2年生川島奈緒美
女みたいな名前だけど男だ

俺の名前を付けた親は中学卒業が近づいていた日
事故でいなくなってしまった

両親がいなくなった後は 義理の親父に育ててもらってる
シヨックで一年間は学校へ行けなかった
そんな時助けてくれたのは義理の親父だった

義理の親父は自動車修理工をしていて自分で工場を持っている
実に幅広くトラックから乗用車や高級車 装甲車まで整備してしまう
「俺の跡継ぎにならないか」
と言われた

義理の親父の家族は母 長女19歳だ

それで俺は親父の教えで一年間で整備士の免許を取ることができた
親父は「最初にメーカーでやってこい」と言われた

しかし何処の採用欄にも資格で 高校卒業とある

中学で就職できると思ったのは甘かった

そのことを親父に話すと

「わっはっは じゃあ学校行って来い！学費は負担してやる」

もちろん親父はかなりの金持ちだと思っ

なんせ役所の車も整備しているからな

住んでいる所は2LDKのマンションでに住んでいる

もちろん一番いい所だ

家賃は親父が経営しているマンションだ

投資目的で丸々一棟買ったらしい

住居者はそこそこだ

家族と一緒にじゃあ気まずいからかな？

もちろん高校選びは悩んだ

公立or私立

もちろん公立が良いと親父に言ったら

「あんた結構頭いいんだろ だったら私立がいいじゃん

一生履歴書に書くからな」

と言われ浪嵐学園にした

けどとってもめんどくさい学校だった

涼月奏とか近衛スバルなどS4 見守る会など

俺にとってどーでもよかった

とにかく卒業できればよかったのである

そんなのがなんでえこーなんの

もちろん共学の中学校だが男子39人女子1人という割合だった

もちろん田舎の小規模校だったからクラス替えなんぞやったことが
ない

ほぼ男子校に近いので女に弱いという弱点があった

まあ 女に絡んだり話したりしなれば特別平気

というか男とも女とも誰とも話したりはしない

寂しい奴じゃんと思われるが仕方ないと思う

授業が終わり昼休み ノートPCをいじくりまわっている

見ているのは学校全体の様子

もちろん遊び目的で仕掛けた隠しカメラ
校舎内には約1000のカメラがある

(なんだこれ)

保健室のカメラに男二人女一人の動画がでた

男一人は拘束されている

「うっこれは後で見よ」

保存をクリックしPCの電源を落とした

午後の授業の鐘が鳴り

下校しようと思いい廊下歩いてたら
出会いがしらに誰かと当たった

「あた」

自分は倒れたが目の前に人が立ってた

涼月奏 だ

涼月は啞然とした顔をしている

言葉を失った

ヤバ PCの画面が保健室での映像だった
「ども すみません」
PCを拾って廊下をダッシュした

工場に着くといい仕事があった
全損したドイツ製高級車を直すということだ
もちろんなおしたものは売るということだ
売り手がいないと時々もらえらるという事がある

空き倉庫に自分の車がある
もちろん事故歴ありだがジャパン製のスポーツカーである
新車ですぐ事故があつたらしいいまもこの車を買つと
新車では500万中古でもいい金額はするだろう
それを部品代200万で済むんだつたらいいと思う

まあおいといてさてとりあえず家に帰ろう
マンションは14階だ
エレベーターは点検中だから階段で登って行った
部屋はインターホン付きオートロックも付きでとても快適な部屋
である

一つはリビングもう一つはPC兼寝室だ
PCはこれから自動車をいじるのにはコンピューター制御が必要と
いう事で

高スペックのPCが5〜6台くらいある

そこにノートPCを置くとピンポーンとインターホーンが鳴った
ハイと画面を見ると

「こんにちわー川島くん」

涼月だあの執事もいる

コンマ数秒で出た考えは

よしシカトしようゆう事で

つなぎに着替え始めた

家賃学費を出す代わりに手伝えということである

無論 手伝わないと学校へ行けなくなり

部屋から強制退室を命じられるだろう

ガチャと開けた先には涼月が

(まだいたのか)

シカトして鍵を閉めるふりをすると

「ねえ 君って川島君だよね」

「ひとちがいじゃないですか？」

「うふ そんなことないわ ずうーと尾行してきたもの」

めんどくさいからシカトして工場へと向かった

「スバル 少し時間つぶしましょう」

「はい お嬢様」

車の容態はひどかった

ボディーは専門の部門にまかせたとして
エンジンは分解をしなければならなかった
とりあえず分解しきって半分まで組んだところで時間が終わった
明日には消耗品類が届くだろうと油まみれで家に帰った

まだいた

もう時刻はPM9時になっているのにまだいた
鍵を開けて中に入っていくと一緒に入ってきた

「何してんですか」

「おじやましまーす」

「へえ 一人で生活しているのに割と片付いているね」

「夜遊びはだめですよ」

「大丈夫 親公認だから」

（公認とかあるのかよ）

「コーヒーしかないけど」

「いいわ 頂戴」

テーブルには本来椅子が一つしか置いてないがパイプイスを出して
きた

「で なんかご用ですか?？」

ちよつと怒りを込めて言ってみた

この時間なら明日に備えてもう寝ているはずだ

早朝の整備だつてある

「うふ、実はあなたスバルの秘密を知ってるんじゃないかと思つてね」

「なんで?？」

確かに知っている昼間の映像は坂町近次郎が涼月奏にスバルが女と言わないことを脅迫している時の映像だった

「昼間あなたがぶつかったときに見ちゃったのよ」

「なにが」

「あなたがあの映像を持っているって」

「はっ?」

「トボケても無駄よ」

「あの時の保健室の映像をどうするつもり」

「どうしよっかなー インターネットではらまくとか」

「貴様」

スバルが蹴りを入れてきたが鮮やかにスバルの足をつかむ
自動車整備で鍛えた強靱な筋肉だからそのくらいは簡単である

「クククそしたらお前は執事クビだわな」

「スバルやめなさい」

「でも……」

「主としての命令です」

「かしこまりましたお嬢様」

「でいくら払えばいいんですか？」

「あいにくお金は困ってなんでね」

確かに 学費 家賃 食費 おこずかいまであれば十分である

その時 ガチャ

「ばっ ばか開けるな」

スバルは寝室を開けた

PCとベッドが置いてある。

もちろん 涼月と当たった時に落としたPCも

やれやれ

「じゃあ消せばいいんだな」

と言って 動画を消した

「はいこれで一件落着 じゃあ帰れよ」

涼月とスバルを追い出した

「ふふふ こんないい動画バックアップとってあるだろう」

と言ってベッドの下からガムテープで張り付けられたUSBメモリから

とりだした

「バーカ」

と涼月にいたかったがやめとく

次の日

朝早くにオイル交換をしてから登校する

僕の席は窓側の一番後ろだ目立たないし自分の専用みたいな感じになっっている

のーんびり授業を聞いていると中休みの時に

「お嬢様が呼んでいる」

とスバルが来た

「もう関係ないだろう」

と答えた

付近のクラスメイトは騒いでいる

「っで何の用ですか??」

「あなた まだ隠し持っていないあの動画??」

「なぜそう思うんですか?」

「あんなに簡単に消すはずないと思ったからよ」

「いいわ今日から徹底的に調べます」

「どーぞ」

帰宅中また尾行してきた

(ちっ メンドウくせーなー)

階段のところで待ち伏せてやった

「ストーカーみたいな真似やめてくれませんか」

「ストーカーあなたの方でしょう」

うっ

まあいいや

「じゃあタイムリミットは俺が帰ってくるまで いいね」

「まって」

「なんだ」

「何処行くの??」

「工場だけど」

「スバルあなたもついて行きなさい。なにか出先で不審なことがないか

調べてきて」

「了解ですお嬢様」

「ちょっとタイム スバルがいたら仕事にならない」

スバルがぶくつと膨れた

「第一 つなぎはどうするの?」

「あなたのクローゼットに新品があるね」

「なんでしってるの!」

「うふっ そのくらい調査済みだよ」

「わかったそれでいい」

工場へ向かい始めた

「………とすることで 近衛スバル君が手伝ってくれます」

「宜しく願います」

まるつきり九時まで働いた

「お疲れスバル」

「こんなに大変なんなのか 奈緒美」

「ああっ」

「ただいまーっておい涼月」

めちゃくちゃ物が散乱している
まあいつか

「でどこにあるの〜??」

「それは言えない」

「じゃあスバルお願い」

「はい お嬢様」

一発いいキックが来た受け身をとりベットに仰向けになった
そこで涼月がカシャ

「なに」

みごとにベットの柵と手錠がつながれた
身動きが取れない

「どっどっするつもりが」

馬乗りになった涼月が言った

「近次郎くんと同じことやってあげる」

「ええっ」

「あと奈緒美君って」

「なっ何？」

「Mだよね」

「ちっちがう」

「だって抵抗しないもん」

「わるかった」

「許さないわ いったい遊んであげる」

「たすけて」

その日の夜は長かった

出会い（後書き）

ご購入ありがとうございました

次はどんな話になるか楽しみです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8560v/>

ある日突然友達ができた

2011年10月8日20時55分発行